

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 蕭紅の散文集『商市街』について

著者	山本 和子
雑誌名	研究論集
巻	95
ページ	53-72
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00006107/">http://id.nii.ac.jp/1443/00006107/</a>

## 蕭紅の散文集『商市街』について

山 本 和 子

### 要 旨

1934年6月、蕭紅と蕭軍は、言論への弾圧が厳しさを増すハルビンを離れ、青島を経て上海へと逃れる。上海に逃れた後、蕭紅は、蕭軍と苦難を共にしたハルビンでの生活を振り返り、散文に書き留めた。それらの散文を集めたのが、散文集『商市街』である。作品を貫くひたむきで誠実な人間性と、情景を彷彿させる表現によって、出版当初から多くの読者を魅了してきた。『商市街』には、1932年10月初め「欧羅巴旅館」に投宿する場面から、1934年6月に商市街25号から出て行く場面までの、41篇の散文が収められている。二人の日常の何気ない情景をスケッチした散文が、時間経過の順に収録されているので、二人の足跡を知る上において貴重な資料となっている。『商市街』の分析を通して、蕭紅作品の背景にある蕭紅自身の個人的事情や、深刻な社会状況を考察する。同時に、執筆時の蕭紅の心理状態を解明し、『商市街』執筆の動機を探る。

キーワード：蕭紅、『商市街』

### はじめに

蕭紅（1911年－1942年）が執筆活動を始めたのは、彼女が21歳のとき、ハルビンの商市街25号で、蕭軍<sup>1)</sup>と共に生活するようになってからである。蕭軍と彼を取り巻く左翼青年たちの支えと励ましのもと、作家蕭紅が誕生した。1933年5月に最初の作品『棄児』を『大同報』副刊に連載、続けて『王阿嫂的死』など1933年に発表した作品は、小説（短編）、散文、詩を併せて16篇に上る。

1931年秋、蕭紅は阿昌の伯父の家から逃げ出した。それから、一年ほどの間に、放浪の末に妊娠、出産、そして生まれた子供を人手に渡すという、女性として、母親として耐えがたい苦痛を立て続けに味わう。極度の困窮生活は彼女の肉体に大きな傷跡を残し、その後一生彼女を苦しめることになる。

辛い、蕭軍に出会い、一緒に暮らすようになって、野良犬のような宿無し状態からは抜け出せたが、食うや食わずの日々が続き、健康を取り戻すにはほど遠い状況であった。それにもかかわらず、一年の間にこれだけの作品を書き上げたのである。その気力、エネルギーが彼女のどこに潜んでいたのか不思議にさえ思える。

食べるものにも事欠き、飢えと寒さとの闘いから出発した二人だが、一年後には餓えと寒さ

を凌げる程度に生活は安定してきた。ところが、こんどは不穏な社会情勢が二人の生活を脅かし始める。日本の傀儡政権による「満州国」が1932年3月に成立したのち、日本の帝国主義的侵略が日々拡大し、思想弾圧が厳しさを増していた。いつなんどきいわれなく逮捕され拷問されるかわからない。二人はやむなくハルビンを離れ、1934年6月に青島へ、11月に上海へと逃れる。

上海へ逃れた後、蕭紅は慣れない異郷の地で、ハルビンでのいわゆる新婚生活を振り返り、散文として書き留めていった。それらの散文を集めたのが、散文集『商市街』である。蕭紅がまさに作家としての第一歩を踏み出した頃の日常の断片がスケッチされているのであり、蕭軍がその「読後記」で記しているように「掛け値なしの生活記録」なのである。

アメリカの蕭紅研究者である葛浩文〔Howard Goldblatt〕はその著書『蕭紅評伝』において、散文集『商市街』は「蕭紅の作品中、最も自伝的であり、最も優れた感動的な作品である」<sup>2)</sup>と高く評価している。また、作家で評論家でもある聶紺弩<sup>3)</sup>も、蕭紅の散文の天分を高く買っていて、彼女に「君は素晴らしい散文家になれる」<sup>4)</sup>と言っている。そのとき、蕭紅は「小説が書けないって言いたいんでしょう？」と反撥したというが、彼女が優れた散文の書き手であることに異論を唱える者はいない。

蕭紅は西安で、聶紺弩にこう言った。「あなたにわかる？ 私は女よ。女の空は低く、翼は薄い。なのに、身の回りには面倒なことが重くのしかかっていて、しかも、とても厄介なことに、女には自己犠牲の精神が多すぎる。これは勇敢だからではなくて、臆病だからなのよ。長い間の犠牲状態の中で身についた犠牲に甘んじる惰性なの。私はわかっている。けれども、やっぱり考えてしまう。私って何？ 屈辱が何だっていうの？ 災難が何だっていうの？ 死ですら何だっていうの？ 私は一人？ それとも二人？ このように考えるのが私なの？ あのように考えるのが私なの？ 私にはわからない。いいわ。私は飛びましょう。けれども、同時に、思ってしまう……私は落ちるだろう、と」<sup>5)</sup>

そんな彼女に聶紺弩は、「君は『生死の場』の作者で、『商市街』の作者だ。自分の文学における地位を考えなければいけない。上に向かって飛ぶんだ。高く飛べば高く飛ぶほどいいんだよ……」<sup>6)</sup>と言って、作家としての、それも一流の作家としての自覚を促した。この言葉は、作家蕭紅に寄せる期待の大きさを示すものであり、『生死の場』と『商市街』に対する評価の高さを示すものである。

—

蕭紅の散文集『商市街』は、「悄吟」の筆名で1936年8月、巴金が編集に当たった『文学叢刊』第2集第12冊として上海文化生活出版社より出版された。蕭紅の作品としては『跋涉』（1933

年10月)、『生死の場』(1935年12月)に次いで第三冊目であり、散文集としては最初に出版されたものである。出版されて一ヶ月経たないうちに第二版が出版されている。このことから見て、当時いかに好評を得ていたか窺い知ることができる。

この『商市街』の「物語」が幕を開ける前、すなわち蕭軍と共同生活を始めるまでの約一年間、蕭紅にとって悪夢のような日が続く。1931年秋、蕭紅は地主である伯父の猛烈な怒りを買って軟禁され、かなり酷い仕打ちを受ける羽目に陥っていた。その窮地から彼女を救い出したのは叔母たちであった。彼女は叔母たちの計らいで、白菜運搬の荷車に身を潜めて阿城まで逃れることができ、そこから汽車に乗ってハルビンに出た。

ハルビンに逃げてきたものの、落ち着く先もなく生活の手段もなかった。窮した彼女は、王恩甲のもとを訪れる。王恩甲というのは親が決めた婚約者で、以前、彼女はその結婚に反撥して北京に出奔し、自らその縁談をぶち壊した、その相手である。王恩甲は行く当てのない彼女の弱みにつけ込み、彼女を東興旅館に連れ込んで、同棲生活を始める。しかし、それは彼女にとって決して心地よい生活とはいえなかった。彼女は王恩甲に頼らずに生きようと、北京に出て活路を模索したり、ハルビンに舞い戻って従姉妹の学校の寄宿舎に潜り込んだりと足掻いてみるが、最後には、妊娠していることに気づき、やむなく王恩甲のもとに戻る。東興旅館での同棲生活は前後7ヶ月に及んだ。

当時、東北地方は「満州国」建国をめぐって、抗日の気運が高まり、傀儡政権との対立が激化していた。王恩甲の父王廷蘭は、軍閥の馬占山のもとで抗日戦を戦っていたが、1932年5月、傀儡政権側の捕虜となり、惨殺される。そのことを知った王恩甲は、自らに累が及ぶのを恐れ、蕭紅をひとり旅館に置き去りにして、姿をくらましてしまった。

残された蕭紅に、旅館の主人は「宿代を払え」と詰め寄った。金が払えないなら人質として軟禁し、子供が生まれた後は妓楼に売り飛ばすという。

大きなお腹を抱えて、文無しに彼女に、そんな金を工面できるはずもない。困り果てた蕭紅は、『国際協報』副刊の編集長である裴馨園に手紙を書いて助けを求める。そうして、7月12日の蕭軍との出会いに至ったのである。<sup>7)</sup>

松花江の氾濫の折り、旅館の二階から舟で救出された蕭紅は、一時、裴馨園の家に身を寄せる。やがて産気づいて入院し、8月末、女兒を出産した。しかし、住むところもなく、己の身一つでさえ食べていくのが困難な状況である。自分も生き、かつ子供も生かすために、やむを得ず生まれた子を人手に渡す。

蕭紅の最初に世に出た作品『棄児』は、そのときの体験をモチーフにしたものである。病室に差し込む月の光。隣の部屋から聞こえてくる赤ん坊の泣き声。その声を聞く母親の胸のうち。視覚、聴覚、そして想念が一体となって、鋭利な刃物で胸を抉られるような哀しみに満ちた情景がありありと浮かび上がる。粗削りの部分はあるが、きらりと光る才華を感じさせる作品で

ある。

難産の末、子供は生まれたものの、産前に飢餓状態が続いていたので、健康は容易に回復せず、貧血、頭痛、腹痛の症状が次々と現れた。しかし、入院費が払えなかったため、医師もろくな治療をしてくれず、退院もできなかった。10月初め頃、蕭軍による強引な交渉と友人の援助によって、やっと退院の運びとなる。<sup>8)</sup>そして、蕭軍に伴われて欧羅巴旅館にやって来たのである。

退院した蕭紅の行き場をめぐっては、一悶着あった。裴馨園の妻が蕭紅を家に入れることを拒んだので、蕭軍は裴馨園と喧嘩になり、彼は『国際協報』の仕事を失ってしまう。つまり月20元の収入が絶たれたのである。

欧羅巴旅館での生活は、二人にとって、まさにゼロからの出発となった。

## 二

1932年10月初め頃、蕭紅は蕭軍に連れられてヨーロッパ欧羅巴旅館にやって来た。欧羅巴旅館というのはロシア人が経営する下宿旅館である。ここでの約一ヶ月間を回想しているのが、『商市街』に収められた『欧羅巴旅館』『雪の日』『彼は仕事を求めて』『家庭教師』『来客』『パン売り』『餓え』の7編である。

欧羅巴旅館に来るまえの波乱に満ちた辛い日々、肉体に大きな負担のかかる出産、生まれた子を人手に渡すという選択、そして一ヶ月もの長期に亘る入院生活等々、蕭紅は相当な無理をしてきたのである。肉体的精神的に衰弱しきっていた。

『欧羅巴旅館』は、次のような書き出しで始まる。

階段はとても長く、まるで小道に沿って天頂まで上れ、と言っているかのようだ。実際には、たったの三階にすぎなかったのだけれども、本当に力がなかった。手すりにすがって、震えて自分の思い通りにはならない足を必死に持ち上げて数歩上がると、手も足と同様、震え始めた。(『欧羅巴旅館』)

このときの蕭紅は階段を一段上がる力さえほとんどなかった。三階までの階段の長さをとてつもなく長いと感じ、三階が「天の頂」のように遙か彼方に感じられる。「私」にとっては絶望的に遠い道のりだった。

やっとの思いで部屋にたどり着いて、ベッドに腰を下ろし、「私」は郎華〔蕭軍〕に、水が飲みたいと言った。しかし、着の身着のままやってきた二人である。茶碗も湯飲みもない。郎華が「洗面器で飲むかい？」と言いながら部屋中を探し回って、やっと歯磨き用のコップを一つ見つけ出した。この後、このコップが「私たち」の唯一の食器となる。

水を飲んで一息ついた「私」は、このときになってやっと、ベッドには白いシーツ、テーブルには白いテーブルクロスが掛かっているのに気づく。部屋全体の印象が白く清潔で、とても心地よい。「私」は指先でシーツの感触を確かめるように撫でさすり、「悪くない」と呟いた。

そこへ、ロシア人のメイドがやってきて、「シーツ借りますか?」と尋ねる。シーツや枕やテーブルクロスは一日五角だという。金のない二人は即座に「借りない」と答えた。すると、メイドはシーツも枕もテーブルクロスもすべてはぎ取って小脇に抱えて持ち去ってしまった。あとには鉄枠がむき出しになったベッドと汚れたテーブルが残され、部屋の様相が一変する。

来る日も来る日も、郎華は食べるために、つまり金を工面するために出掛けていく。「私」は空腹を抱えて、日がな一日、ただただ郎華の帰りを待っていた。

「私」は、雪と同じように意味のない存在だと感じ、椅子に座って両手は空いているのに何もせず、口を開けても何も食わず、完全に「停止した機械」と同じだと思った。お腹が空きすぎた「私」にとって、狭い部屋は「荒涼とした広場」のようで、部屋の壁は天よりもずっと遠くに感じられた。

通路に足音がすると、「私」は郎華の足音かしら?と、どきどきする。彼は可哀相なくらい凍えているのではないだろうか? 彼はパンを買ってくるだろうか?

ドアを開けると、そこにはボーイがいた。

「夕食込みにしますか?」

「いくら?」

「毎食6角、月15元」

「……」

私は少しも躊躇することなく頭を横に振った。ボーイがご飯を持ち込んで私に無理矢理食べさせるのを恐れるかのように、彼が私に金を要求するのを恐れるかのように。

郎華が帰るまでずっと、ボーイの手にしたトレーが脳裏から離れなかった。肉入りのピン(餅)、フライド・ポテト、大きく切り分けられたふわふわのパン、……

(中略)

むき出しのテーブルの上で、歯磨き用のコップが湯気を立てている。歯磨き用のコップをお供に、私たちはマントー〔中国式蒸しパン〕を食べ終えた。マントーを食べ終えたということは、テーブルの銅貨も食べられてしまったかのようなのだ。彼〔郎華〕が私に尋ねた。

「足りたかい?」

私は「十分よ」と言って、彼に尋ねた。「足りたの?」

彼も「十分だ」と言った。(『雪の日』)

言葉少なに交わす会話の中に、貧しい食卓の風景がありありと浮かび上がり、読者は思わず二人の胸のうちに思いを馳せる。そして、二人の言外の思いを察知するのである。情報の空白を心で補うとき、想像は現実を超える。蕭紅は情景を淡々と描写するにとどめ、空白を残して読者の想像に委ねる。読者はその空白を補って、二人の心情を思い遣り、その想像によって心動かされるのである。

早朝、他人の部屋のドアの前には牛乳が置かれ、取っ手にはパンが掛けられている。その光景を見ただけで、何日もまともな食事をしていない「私」はパンのことで頭がいっぱいになる。

ドアを閉めていても、小麦の香ばしい香りを嗅ぐことができ、まるでパンが「私の鼻先にぶら下がっている」かのように感じられた。口にするのでできない他人のパンが「私を虐待する」のだ。ついに「私」はパンに恐怖を抱くようになる。「パンを食べたいからではなくて、パンが私を呑み込むのではないか」と恐れるようになった。(『パン売り』)

極度の飢餓感がパンと人との関係をいびつにしていく。まさに沈巧瓊が指摘しているように「苦難に満ちた生活は、物と人の関係に微妙な変化を生じさせる。人が物を主宰するのが、知らぬ間に物が人を主宰するようになる」<sup>9)</sup>のだ。つまりパンが「私」を支配し始め、ついに圧倒してしまう。「私」の良心は次第に麻痺し、パンを盗むことの善悪さえも判断できなくなっていく。

朝早く目が覚めた「私」は、お腹が空きすぎて、もう眠れない。まだ夜が明けきらない薄暗い廊下。他人の部屋のドアの取っ手にはすでに配達されたパンが掛かっており、牛乳の瓶がきちんと並べられている。

郎華はベッドの上でぐっすり眠っている。呼吸も空気を揺り動かすことはない。旅館の三階全体が眠りの中だ。この静寂が「私」を誘惑する。他人のパンを盗るという尋常ではない考えが「私」の中で、どんどん膨れあがっていく。パンは目の前にある。誰も見ていない。盗るなら今だ！

そっと鍵をひねった。ドアは少しも音を立てなかった。廊下に頭を突き出して見ると、パンは向かいのドアに掛かっている。東隣にも、西隣にも掛かっている。まもなく夜が明ける！牛乳瓶の乳白色がとてもはっきり見え、パンはいつもより大きい。結局、何も取らなかった。胸が熱くなり、耳たぶも熱くなって、すぐさまこれは「盗み」だと思った。子供の頃「梨を盗んで食べる子は最も恥ずかしい」と言われた記憶がよみがえった。長い間、私は閉めたドアに貼り付いていた。おそらく魂のない切り紙細工の人形のようにドアに貼り付いていた。たぶんこんな状態だっただろう。通りに行く車の音が私を呼び覚ました。馬の蹄がダッダッと響き、車輪がぎしぎし軋んで通り過ぎていった。私は胸を抱きしめ、頭も胸元まで垂れて、自分自身に言い聞かせた「私は飢えているのよ！盗むのでは

ないわ!」(中略)

二回目も失敗した以上、もう三回目はない。盗らないと決めてベッドに上がり、灯りを消して郎華をつついてみた。彼は目を覚まさない。私は彼が目を覚ますのを恐れた。盗むというその瞬間、郎華だって敵だ、たとえ私に母親がいたとして、母親だって敵だ。(『餓え』)

ぎりぎりのところで理性が欲望を制したのだが、飢えと無為の日々が人間の精神を蝕み、やがて正常な判断ができなくなっていく。その経緯が赤裸々に綴られている。

葛浩文は「飢えが生理的・心理的に影響を与えるのは明らかであるが、同時にまた、何もすることがない極めて無聊な気分も、飢えた人間を次第に無気力にしていく。飢えた人間は、ひたすら腹を満たすことを求め、そのために、まともなことが何もできなくなる。そういったことを蕭紅は悟っていた」<sup>10)</sup>と論じている。視覚、聴覚、嗅覚等、あらゆる感覚を駆使して臨場感溢れる筆致で、精神が麻痺していく過程が描き出されたこの場面は圧巻である。

夜が明けると、郎華はお茶を一杯飲んだだけで、武術の家庭教師に出かけた。

部屋には、小さな窓が一つあって、唯一その窓から外の世界を見ることができた。「私」は一人で部屋にいるとき、しばしばその窓から外の景色を眺めて過ごした。

目の下には、直線的で様々な角度に錯綜した建物群が広がっている。旅館の向かいには薬店があって、その店の前で、女が子供の手を引き、懐には赤ん坊を抱いて物乞いをしている。しかし、薬店も通行人も、「彼女に子供がいるのが間違っている、貧しい者は子供がいてはいけない、いたとしても死ぬべきだ」と言うかのように、女のことを相手にしない。

蕭紅は物乞いの女に自分を重ねた。自分が子供を棄てなければならなかったのは、食べていけなかったからであり、「貧しい者は子供がいてはいけない」と言わんばかりの、世間の冷やかな視線を感じ取っていたし、また自らにもそう言い聞かせたのである。

蕭紅は自ら飢えに苦しんでいるがゆえに、物乞いの女の苦しみを誰よりも理解できた。その女の苦しみを自分の苦しみとして共感できる状況にあった。「旦那様、奥様、お恵みを……」と、必死に物を乞う声を聞いて、「その女はきっと自分と同じように、朝ご飯を食べていないに違いない。おそらく昨夜も食べていないのだろう」と想像する。

1932年秋から冬にかけての欧羅巴旅館での生活は、飢えとの闘い、パンとの闘いに尽きる。

それでも、のちの蕭紅にとってはかけがえのない日々であった。食べるものさえあれば、二人とも満足できたし、飢えを満たすことで幸せを感じることができたのである。

蕭紅はほとんど旅館の一室で過ごした。そうして、心と身体に受けたダメージから辛うじて立ち直ろうとしていた。それは、あたかも深傷を負ったけものごとじと蹲って傷を舐めて癒す姿にも似ている。



三

蕭軍は友人の紹介で、ハルビン鉄路局庶務科長の屋敷内に部屋を借りて、その息子の家庭教師をすることになった。家庭教師の給料と家賃は相殺である。1932年の10月末或いは11月初め頃、二人はその屋敷のある商市街25号に引っ越した。<sup>11)</sup>

引っ越してから年末にかけての約二ヶ月間を回想しているのが、『商市街』に収められている『引っ越し』『最後の一本の薪』『黒パンと塩』『暮らし』『雪が降る』『彼の上唇に霜が掛かった』『質入れ』『借りる』『帽子を買う』『看板描きの夢』の10編である。

商市街25号の屋敷は、中庭を囲むように口の字型に建てられた二階建ての家屋で、蕭紅たちの部屋は、西側の半地下にあった。冬になると、一日中、太陽の光が届かず、暖炉に火がないときは窓やドアのガラスにはびっしり厚い氷が張って、「いつ夜になったのか、いつ夜が明けたのかわからない」状態である。

季節はまさに厳冬を迎えようとしていた。郎華は毎日、雪の中、仕事探しと借金に出掛ける。一日中駆け回っても、借りることができた金はとて少なかった。だから、米を買えず、黒パンに塩を塗り、白湯を飲んで飢えを凌いだ。ときには、黒パンにさえもあつけない。「仙人になる人のように苦しい修練を積んだ。修練の結果は顕著に現れ、顔も黄色くなって、身体も痩せた。私の目はますます大きくなり、彼の頬骨は木片のように突き出した。これらの修練はすべて成し遂げた。ただし、まだ仙人にはなっていない」(『黒パンと塩』)

郎華が仕事探しと借金に出掛けている間、「私」は薄暗い部屋に、一人取り残され、腹痛と寒さと餓えに苛まれていた。暖炉が燃えているときは、ずっと暖炉の前で過ごし、薪がないときは、一日中、ベッドの上で布団にくるまって座っていた。まるで「井戸に落ちたアヒル」のように寂しく隔絶され、家は「夜の広場」さながら、太陽もなく、温もりもない。飢えと寒さと孤独感で、気分は減入るばかりだった。

しかし、郎華が帰ってくると、気持ちが落ち着き、不安も消える。郎華がそばにいてくれさえすれば、餓えも耐えることができたし、腹痛も和らいだ。郎華の大らかで機知に富んだ対応が、「私」の心を和ませ、辛さを忘れさせたのである。例えば、『黒パンと塩』に映画のシーンを真似る場面がある。「ぼくたち、ハネムーンじゃないか?」と言って、パンをちぎってバターの代わりに塩を塗り、「私」の口に運ぶ。「私」も映画の花嫁を真似て、一口嚙り、それから、郎華も一口嚙った。ところが、塩が多かったので、彼は急いで水を飲み、「だめだめ、こんなふうにはネムーンを過ごしていたら、塩辛くて死にしまう」といった具合に。それで、「私」の気分はずいぶん解れるのである。

こうした彼と過ごす時間が「私」に束の間の安らぎを与えたのであるが、その一方で、生活のために奔走する郎華と、ひたすら彼の帰りを待つ「私」の間に、意識のずれが生じていた。

ある夜、「私」はいやな夢を見た……豚の群れが雪の穴に落ちる。雀が電線にとまったまま凍死する。ぐっすり寝ている郎華を起こして、「どうしてこんな夢を見るのかしら？ 迷信ならどうということなの？」と、問いかける。すると、郎華は極めて冷静に答える。

「ほんとうにばかだな。すべて科学的に解釈しなければならないよ。君はこの夢はある種の心理だというのが、心理はどこから来るのかね？ 物質の反映だ。肩をさわってごらん、冷たいだろう？ 肩が冷えていると感じたから、そんな夢を見るんだ」そう言うと、郎華はすぐ眠ってしまった。（『雪が降る』）

感情が先行する「私」と理論家肌の郎華、二人の意識のずれが浮かび上がる一幕である。

郎華は朝起きてすぐ出かけ、ご飯を食べると大家の子供に国語を教え、すべて終わると、借金に出かける。夜、郎華は疲れてぐっすり眠りこけている。「私」は非常に孤独を感じた。

「いつ帰ってくるの？ いつ帰ってくるの？」私はドアの外まで彼を追いかけて尋ねた。まるでずっと捉まえることのできなかつた鳥が、捉まえたと思ったらまた飛んでいってしまうかのように。失望と寂しさに、シャオピン（焼餅）を食べてはいるが、飢えて倒れてしまいそうだった。

お向かいのお嬢さんたちのイヤリングと郎華の上唇にかかった霜が対照的だ。向かい合って住んでいるのに、あちらの家の娘は映画を見、イヤリングをつけている。私の家は？ 私の家は……（『彼の上唇に霜がかかった』）

忙しい郎華と「廢人」のような「私」。おしゃれをして優雅に暮らすお向かいのお嬢さんと、飢えと寒さに困窮する私の家。男と女。金持ちと貧乏人。強者と弱者の対比によって、明暗の差が際立ち、弱者の惨めさが浮き彫りになるのである。

#### 四

この頃、蕭紅に転機が訪れる。そのきっかけをもたらしたのが、画家の金劍哨<sup>12)</sup>である。

蕭紅は、金劍哨が映画館で看板描きの仕事をして、月40元の収入がある、というのを聞いた。彼女はもともと画を描くのが好きで、一時期、画家になりたいと思っていたこともあって、看板描きの仕事に興味を抱く。

郎華は40元の収入に心は動くが、仕事の内容が気に入らない。

「……なにが面白いんだ、たった40元のためにあいつらに振り回されて！ どんな広告を描くんだ？ 情欲だの、ロマンスだの、快樂だの、まったく恥知らずでいやらしい！」

寝るときになっても、彼はこのことを忘れていなかった。「ねえ、ぼくたち、見識のないエゴイストでなくて何なんだ？ 自分が飢え死にするのが怖くて広告を描きに行くなんて。上手に描けたとしても、エロ映画を見るやつらを招き寄せて、きらびやかなものにとりさせて、人々を一步一步華美な世界に志向させるだけじゃないか……それでも自分が飢え死にするのが怖くて、どれだけの人間を毒するかも考えない。人間は自分勝手なものだ、……もし、二百元の月給をくれたら、何でもやるんじゃないか？ ぼくたちはたとえ歴史を推進することができないにしても、反対の立場で歴史を腐敗させることに励むべきではない！」（『看板描きの夢』）

しかし、郎華は「私」に隠れてこっそり応募手続きの事務所を訪れたり、友人に誘われると「私」よりそわそわと、食事もいい加減に、飛び出して行ったりと、「私」より熱心に広告描きの仕事にありつこうとした。

郎華の留守中に友人が来て、「私」は彼の仕事場についていった。そして、広告描きの仕事を手伝い、帰りが遅くなる。家では郎華が腹を立てて待っていた。

この夜、けんかをした。彼は酒を買ってきて呑んだ。私もひたたくって半分呑んだ。泣いた。二人とも泣いた。彼は酔っぱらったのち、床の上でわめいた。

「仕事を見たらなんにも考えず行ってしまう。仕事があれば夫もいらなくなる！」

私は悪い女だろうか？ たった二十元のために夫を床の上で転げ回らせて！ 酔った心は火のように燃え、熱湯のように滾る。泣くにしてもなんで泣かなければならないのかわからない。すでに理性を失っていた。彼も私と同様に。（『看板描きの夢』）

『看板描きの夢』は、『跋涉』に収録された短編『看板描きの助手』と同じモチーフの作品で、40元の給料のために翻弄される二人、つまり欲と理念の狭間で右往左往する二人の姿が、風刺を交えた筆致で生き生きと描き出されている。『商市街』の中でも秀逸な一編である。

## 五

看板描きの仕事に就くことはできなかったが、このできごとを通して蕭紅の得たものは大きかった。洪水被災者救援の絵画展の開催に協力し、自らも作品を出品した。画展は成果を上げることはできなかったが、「ヴィーナス画会」や、「牽牛〔アサガオ〕房」など、彼女の交友関係は一気に広がりを見せる。1932年末から翌夏にかけての状況は、『商市街』に収められた『新しい知り合い』『牽牛房』『十元札』『同じ運命の小魚』『愉快な日々』『女教師』『春は梢の先に』

『こそ泥と車夫と老人』『公園』『夏の夜』の10編から窺える。

「牽牛房」というのは、もともと画家の馮詠秋の住まいで、ロシア式の平屋建築であった。ハルビン陥落後、黄田が引っ越してきて、西側に黄田が、東側に馮詠秋が住んだ。馮詠秋が客好きで、ハルビンの文化人たちがよく彼の家に集まって、議論をしたり、遊びに興じたりして、「サロン」のような様相を呈していた。黄田の妻が庭に朝顔を植え、夏には朝顔の花が色とりどりに咲いたので、「牽牛房」と呼ばれた。

黄田は『商市街』では「太った友人」として登場するが、もともと蕭軍の東北陸軍講武堂の学友である。「満州国」の香房警察署署長であるが、密かに抗日運動に携わっていた。

鉄峰によると「牽牛房」は、「左翼の文化人が集うのみならず中国共産党の地下組織の連絡場所にもなっていた。蕭紅はここで視野を広げたのみならず、文学創作の知識を深めた。さらに、羅烽、金劍峭、舒群、李文光、白朗、黄田等の中国共産党員から抗日愛国の思想的影響を受けた」<sup>13)</sup> という。

蕭紅は、1932年大晦日、「牽牛房」で過ごしたときのことを次のように記している。

……………私も（松の実を）食べてはいるが、私は他の人のようには風流を感じていたわけではない。他の人は食べて楽しんでいるが、私は餓えを満たしていたのだ！ だから次々と呑み込んで舌の上で味を楽しむ時間は少しもなかった。

家に帰ってから、郎華にこのおかしな話をした。彼も知らず知らず松の実をたくさん食べた、ご飯を食べるように松の実を食べた、と言った。

最初、私は二人の感覚がどうしてこんなに似ているのか、と不思議に思った。けれども少しも不思議ではない。餓えが二人の気持ちを同じにしていたのだ。（『牽牛房』）

陳潔儀は、「欧羅巴旅館」がハルビンの「ロシア化社会」の隠喩と言うならば、「牽牛房」は現代的「都市社会」の縮図である<sup>14)</sup> という。ハルビンの文化人たちが集う「牽牛房」には、二人のように飢えている者はいなかった。

「牽牛房」からの帰り、蕭紅は黄田の妻から十元札の入った封筒を手渡された。この十元札で蕭紅は大いに元気づく。翌日も「牽牛房」でたっぷりご馳走になり、夜遅く家路に就いた。

このとき、私は歩くのも元気よく、餓えも怖くなかった。家では十元札が私を待っている。私はとても満ち足りていて大股で歩いた。寒風も私に打撃を与えることはできなかった。

（中略）

私の勇気は、商市街にやって来るまでずっと消滅することはなかった。頭に、胸に、背中に、足に、それぞれ十元札が貼りついているかのようで。私は十元札に鼓舞されて、可

笑しいほど浅はかだった。(『十元札』)

その間にも、傀儡政権は統治を強固にするため、知識分子に対して懐柔と攻撃の両方の手段を使い分けながら、言論統制を強化してきた。一方では「慰安娯楽」文芸を推奨して、読者の反抗意識と闘争精神を麻痺させることを謀り、一方では満州国統治に批判的な言動に対しては容赦なく攻撃を加えた。

このことによって文芸作家の間で急激に分化が生じた。ある者は書くのをやめ、ある者は当局の手先となって「慰安娯楽」的作品を書き、ある者は「春秋の筆法」を用いて満州国統治の罪状を暴き出して、人々の民族意識を目覚めさせ、階級闘争への覚悟を促した。

中国共産党地下組織は、『国際協報』副刊『国際公園』および『ハルビン公報』副刊『公田』を利用して文学創作活動を行い、抗日愛国と革命思想の宣伝を企てた。そのために書き手を必要としていたのである。鉄峰はそうした当時の情勢を踏まえて、「蕭紅が筆を執って文学創作の道を歩み始めたのは、完全に抗日愛国闘争の政治的需要に因るものである」<sup>15)</sup>と論じている。

蕭紅は蕭軍たちの励ましを受けて、創作を始めた。最初は謙遜していたが、最初の作品が掲載されたことで、手応えを感じた蕭紅は、その後、悄吟の筆名で次々と作品を発表する。<sup>16)</sup>

当時、満州国國務院の機関誌であった『大同報』副刊の編集者陳華は、蕭軍の長春「吉長道立商埠国民高等小学校」時の学友であった。その関係を利用して、蕭軍は彼に週刊『夜哨』を創刊することを提案し、蕭軍がその原稿を集めて長春に送って、陳華が編集することに話がまとまる。こうして生まれた『夜哨』に、東北の左翼作家たちは次々と作品を発表した。<sup>17)</sup>

## 六

1933年秋から年末にかけて、『商市街』に収められた作品には、『家庭教師は強盗』『冊子』『劇団』『白い顔』『またも冬』『門前の黒い影』『決意』の7編がある。

10月に、蕭軍との二人の作品集『跋涉』<sup>18)</sup>を出版するが、直ちに発売禁止になる。『冊子』には『跋涉』出版の興奮と喜びが、『劇団』には『跋涉』出版によってもたらされた恐怖が綴られている。

ゆらめくロウソクの薄暗い灯りのもとで、蕭紅は目が痛くなるまで清書を続けて、『跋涉』の原稿を仕上げる。そして、印刷所で、完成間近の冊子、即ち『跋涉』を見たときは、喜びも一入で、子供のころ母親が新しい服を作ってくれたときより、ずっと嬉しい気持ちになった。

二人は中秋節前日、印刷所に行って、まる一日掛けて製本し、百冊を運んで帰った。

家で床に冊子を並べた。友人たちが手に取るのは冊子、語るのも冊子のこと。同時に冊子に関するデマがとんだ。没収されるとか、日本の憲兵に逮捕されるとか。

逮捕はなかったけれど、没収は本当だった。書店に並んだ本は数日経たないうちに発売禁止になった。(『冊子』)

『跋渉』の大部分の作品は、「日本傀儡政権下における社会の暗黒面を暴いて、売国奴が人民を威圧する罪状や地主の農民に対する残酷な搾取および抑圧を告発し、大胆に多くの労働者人民の覚醒を褒め称えたので、印刷が終わって書店で発売されるとすぐ、日本傀儡政権の警察によって没収された。自分たちで印刷して出版した喜びもつかの間、恐怖に変わった」<sup>19)</sup>のである。いつ自分たちに警察の捜査の手が及ぶか知れない。そう考えた二人は部屋を片付け始める。

ベッドの下からトランクを引っ張り出し、床いっぱい原稿用紙をおちまけて、ロウソクの光で、丹念に点検していく。少しでも「犯罪的」だと思われるものはすべて炉に放り込んで燃やした。ゴーリキーの写真も燃やした。炉の火は顔が痛くなるほど燃える。日本の憲兵が今にも捕まえにやってくるような気がして、急いで燃やした。

ベッドに横になってからも、音のするものはすべていつもより大きな音を立て、いつもは音のしないものまで音がすることに気づく。天井が音を立て、瓦屋根が風に吹かれて音を立てる。些細な音にも、子供のように怯える「私」に、郎華が優しく言い聞かせる。「恐れることはない。ぼくたちに何かあるのかね？ 何もない。デマをあまりまじめに考えるな。こんちくしょう、捕まったら捕まったときのことさ！ おやすみ、寝不足だと、明日頭痛になるよ」(『劇団』)

この出来事の数ヶ月前、1933年初め、金剣哨らを中心に、「慰安娯楽」に対抗して、人民大衆の民族意識を喚起することを目的に「星星劇団」が組織され、蕭紅と蕭軍も参加していた。

三ヶ月間、演劇の練習を重ね、ある日、映画館で劇の舞台稽古をするために集まった。全員揃ったのに、稽古を一度も休んだことのない徐志だけ来なかった。皆、彼が病気になったと思った。だが、実は、警察に捕まっていたのだ。結局、劇団の公演は頓挫する。当局の監視が厳しくなり、恐怖が劇団の上に覆いかぶさった。

家に帰ってドアに鍵をかけ、また本箱を片づけた。何も片づけるものがないことはよくわかっていたが、本能的に片づけずにはいられない。のちには、あの冊子を通路から薪小屋へ持って行った。冊子を見ても嬉しくなく、却って厄介ものに思えた。(中略)

どうにもしようがない。逃げるにしても旅費がないし、また、どこへ逃げればいいのか？ 不安定な生活が再び始まる。以前は餓えに苦しみ、なんとか食べていけるようになったら、今度は恐怖に苦しむ。これまでにいくわしたことのない悪いうわさと事実がすべてこのときやって来た。日本の憲兵が一昨夜、だれそれを捕まえていった。昨夜はだれそれを捕まえていった、昨日捕まったのは劇団の関係者だ……(『白い顔』)

当局の文化統治による弾圧が厳しさを増し、ハルビンの抗日愛国の革命文芸は次々と打撃を受ける。『跋涉』が発売禁止となり、「星星劇団」が解散せざるを得なくなり、『夜哨』が停刊に追い込まれた。

劇団が解散した後、蕭紅はもっぱら創作に専念し、創作の第一次ピークを迎える。秋には、すでに電灯を取り付けて、彼女は電灯の下で原稿を書いていた。蕭軍は相変わらず出かけて家にいない。去年は家庭教師をしに出掛けたのだけれど、今年は遊びに出掛ける。

『夜哨』の停刊の後、白朗<sup>20</sup>が『国際協報』副刊の編集者であることを利用して、1934年1月18日、新たに『国際協報』週刊『文芸』を創刊。執筆者が『夜哨』と同一メンバーであることがばれないように、皆、筆名を変えて原稿を書いた。

蕭軍は筆名を三郎から田倪に変えた。蕭紅は悄吟から田娣に変えて、『患難中』（1934年3月）と『鍍金の学説』（1934年6月）を『文芸』に掲載した。

蕭紅にとってこの時期の最大の収穫は、小説『麦場』（『生死の場』の第一章と第二章）であろう。二部に分けて、第一部は1934年4月20日から5月4日まで6回にわたり、第二部は5月5日から5月17日まで9回にわたって『国際協報』副刊『国際公園』に連載された。

蕭軍は「慰安娯楽」的作品に対して論戦を仕掛け、変節した文化人を批判して、反感を買っていた。彼は当局にマークされたのみならず、作家の中にも彼を陥れようと狙う者がいたのである。『商市街』の中でも、『家庭教師は強盗』や『門前の黒い影』に、それらしき記述がある。

早朝、郎華の友人がやってきて、帽子も脱がず腰掛けることもせずに緊迫した面持ちで、「君たちに関してよくない風評が立っている」と言った。さらに、「用心しろよ。誰かが君たちを陥れようとしているらしい」と言って、そそくさと立ち去った。（『門前の黒い影』）

悪いことがすべて一度に起きたかのようで、友人たちの様子が変わった。

友人の舒群がやってきて、「特務に見張られている。ほくは青島へ逃げる。君たちもここを離れたほうがいい」と言って、青島へ逃走した。舒群は『跋涉』を出版するとき、貧しい父親に渡した金を取り返して、彼らを援助した人物である。

黄田もハルビンから脱出することを勧めた。彼は「旅費の援助はする」と言い、「毎日、捜査課で尋問していて鞭の音が響くんだ。君たち、脱出しろ。もし僕の友人が連れて行かれて……その音を聞いていられるかい？ あいつらを見ると、君たちのことが気になって……」と言う。

商市街に引っ越してきてから一年経ち、再び冬が巡ってきた。窓の前の大雪は白い綿毛のように絶え間なく降り、一日中降りやまない。去年凍傷になった足は完全に治って、今年は凍えることはない。暖炉は赤々と燃え、ときどき薪の炸裂音が聞こえる。去年は薪が買えず寒さに凍えたが、今年は薪小屋に積み上げてある。

食料も調味料も薪もたっぷりある。それでも、満足だとは感じない。麺に肉みそをつけて食

べても、去年、米のご飯に塩をつけて食べたほど楽しくない。去年より生活は豊かになったけれども、書店に雑誌は一冊もない。あるのは三年前から陳列棚に並んでいる色褪せた古い本ばかり。もう、こんなところにはいられない。

この土地を出ていくということは、興奮することのようであり、悲しいことのようにもあつた。すると、私の手はお茶を淹れながら震えた。

「流浪しに行こう！ ハルビンも決して故郷ではない。だったら、流浪しに行こう！」  
郎華は湯飲みを両手で持ったが、飲まずにテーブルに置いた。

涙がすでに私を満たしていた。

「悲しむことはないよ。行こう！ 僕がそばにいるから、どこへ行ったって大丈夫だよ」  
私はうなだれて、「このお鍋はどうするの？」と言った。

「まったく子供なんだから、鍋や茶碗がどうだっていうんだ？」（『決意』）

劇団の徐志は捕まえられ、冷水で拷問されたり鞭で打たれたりしたという。ここには、もう留められない。どこかに行かなければならない。二人は、いよいよハルビンを去る決意を固めた。

## 七

1933年末から1934年の6月12日に商市街を離れるまで。

『商市街』に収められた作品は、『南から来た娘』『見知らぬ人』『またも春』『病気』『十三日』『家具を叩き売る』『最後の一週間』の7編がある。

春、松花江の氷が溶け、木の芽が萌え出す。いつもと変わらぬ朝、「私」は突然、激しい腹痛に襲われた。町医者、それも咽喉科の医者の診断によると「盲腸炎」らしい。

郎華に、友人の家で療養するよう説得されて、雨の中、車で田舎にある友人の家に向かう。

友人の家で、癪に罹ったみたいに、身体が熱くなったり、寒くなったりした。病気になった猫のように、自分の苦痛をじっと我慢して、まるまる一週間、布団を被ってオンドルの上に座っているか、寝ているかしていた。

郎華は「三日に一度見舞いに行く」と言っていたのに、八日目にやっと来た。

二回目に郎華が来たとき、「私」は彼と一緒に帰ると決めた。ところが、郎華に反対される。

「君は帰れない。家に帰ったら家事をしなければならない。君の病気は休養しなければいけないんだ。二週間後、僕たちは出発することになっている。病気がよくなったばかりで、また疲れて病気になったら、どうしようもない」



「帰る、私は帰る」

「わかった、帰りなさい！ 少しも理性がなくて、自分を克服できない人はどうしようもない。帰ればいいさ！ 病気をぶり返しても、もう知らないぞ！」

私はまた留め置かれた。窓の外の梨の実がだんだん大きくなってきた。私は絶えずあれこれ考えた。貧しい者には家がない、病気になったら友人の家に追いやられる。（『十三日』）

沈巧瓊は「蕭紅は棄てられた思いを強烈に抱いた。彼女は家を離れたら家を失うのではないかと恐れていた。家に残されて待っているのは辛いのだが、彼女を待っている家がないのはもっと辛かった」<sup>21)</sup> という。

1934年5月末、二人は青島の舒群から、青島に来るよという手紙を受け取る。

友人たちは皆、二人がハルビンを脱出することに賛成し、お金を出し合って旅費を援助してくれた。うち半分は黄田が出した。

出発の日が近づき、家に戻った蕭紅は家具を売り払って、出発の準備を進めた。

「郎華、出発する日を決めましょう」

「今日は三日、十三日にしよう！ あと十日ある。どうだい？」

私は驚いたように、立ち止まった。いよいよハルビンとお別れだ。あと十日、十日経ったら私たちは車中に、船上にいる。松花江を見ることができなくなるのだ。「満州国」が存在するかぎり、私たちはここには戻れない。（『最後の一週間』）

公園を散歩しても、いつもとは違って見える。見るものすべてが愛おしく感じられた。出発の日が近づくとつれて、心が乱れ、食事も平穩にできなくなり、夜もよく眠れなくなった。

そして、出発のときが来た。

郎華が「さあ、行こう」と言って、ドアを押し開けた。

これはまさに、引越して来たとき、郎華が「さあ、入ろう」と言ったのと同じだった。

ドアが開き、私は外に出た。足が震え、心が重く沈んだ。涙を堪えることができなかった。泣くときだ！ 涙を流して当然だ。

私は一度も振り返ることなく大門を出て、家と別れた。街をゆく車、人、小店舗、歩道わきのポプラの木。曲がり角に来た！

さようなら、「商市街」。

ふろしき包みを手にさげて、私たちは中央大街を南へ歩いた。（『最後の一週間』）

この時期、陳涓（『南から来た娘』では「程女士」の名で登場）に対する蕭軍の微妙な感情、蕭紅自身の病気、さらにハルピンとの別れ等、蕭紅にとって辛くて心晴れぬことが多かった。彼女は毎回追われるようにして転居を繰り返すが、このときほど去りがたい思いをしたことはなかった。

## おわりに

蕭紅が『商市街』の散文を執筆したのは、1935年から1936年前半にかけてである。二人が商市街を離れてから一年以上経過している。この一年余りの時間の中で、彼女のなまなましい感情は鎮静化され濾過され熟成された。そうして、このように読者の心に響く抒情豊かな作品が生まれたのである。

一方、すでに多くの蕭紅研究者が指摘しているように、執筆時の彼女の気分が、作品に与えた影響も見逃すことはできない。作家としては順風満帆に見えるこの時期、彼女は孤独と不安に苛まれていた。「作家が執筆の対象とするのは、その作家が最も関心を持っているものである。蕭紅がこの時期に蕭軍との生活にこれほど関心を寄せたのは、まさしく二人の間に問題が生じたからである」<sup>22)</sup>と、馬雲が論じているように、蕭紅は、蕭軍との関係に悩んでいたのである。

当時、感情のコントロールに苦しむ蕭紅を、間近で見ていた許広平は次のように記している。

彼女〔蕭紅〕は時には楽しそうにおしゃべりをしたが、より多くの場合、無理におしゃべりをして強烈な哀愁に襲われた。それは紙で水を包むように、滲み出ないわけにはいかなかった。もちろん蕭紅女士もできるだけ抑えているのだが、ヤカンに火を掛けたとき、ヤカンの外側が水滴でいっぱいになるように、少しも覆い隠せなかった。<sup>23)</sup>

結局、二人は1938年に離婚するのだが、そのとき、蕭紅は聶紺弩に心の内を語っている。

「私は彼を愛している。今でも愛している。彼は優秀な小説家だし、思想の上においては同志だわ。共に苦難と闘ってきた。けれども、彼の妻であることはとても辛い！ 男の人は、どうしてあんなにかんしゃく持ちなのかしら？ どうして自分の妻に当たり散らすのかしら？ どうして自分の妻に対して忠実ではないのかしら？ ずいぶん長い間、屈辱に耐えてきた……」<sup>24)</sup>

蕭紅は、蕭軍が彼女に対して誠実でないこと、彼女を鬱憤晴らしの対象にすることに傷つき苦しんでいた。その内心の苦痛を抑制しながら『商市街』の一編一編を書き綴ったのである。

馬雲は『『商市街』はまず、蕭紅は自分のために書いたのであって、自分の心の内をもう一度見直したのだ。彼女は心を静めて、二人の関係と感情のどこに問題が生じたのか、省察した。いくつかの文章は作者の内心の独白である』<sup>25)</sup>と見る。自分のために書いたというのは過言ではなく、蕭紅は書くことによって、やっと心の平衡を保ち得たのである。彼女は注意深く過去の生活を見つめ、内心の体験を回想し、自己の真実の情感世界を率直に表現した。そのひたむきで誠実な情感世界の真実が、読者の強い共感を呼ぶのであり、いつまでも瑞々しさを失わない所以なのである。

蕭紅の散文の特色について、王超英が「物語性を有することが多く、起伏に富んで、小説的芸術構造を備えている」<sup>26)</sup>と述べているように、『商市街』の一編一編にもそれぞれ起伏があり物語性がある。そのような散文が連なってストーリーが形成され、全体として一編の小説を思わせる作品となっている。日常の何気ない場面のスケッチであるが、それらが積み重なることによって、豊かな情感と生活感の漂う味わい深い境地を醸成しているのである。読み終えたあとにはどこか切ない余韻が読者を包むその手法は、のちに書かれる『呼蘭河伝』に通じるものを感じさせる。

『商市街』には、41篇の散文が時間経過の順に収録されていて、そこから、二人の生活の変化の過程が読み取れる。残された資料の乏しい時期のことであり、蕭紅の足跡を知る上において極めて貴重な資料となっている。さらには、彼女の散文の特色を研究する上においても重要な意義を持つのである。

- 
- 1) のちに蕭紅の伴侶となる蕭軍（本名：劉鴻林、1907年－1988年）は遼寧省生まれ。蕭紅より4歳年上である。瀋陽の「東北陸軍講武堂」で学び、軍隊に配属される。1929年より「酩酊顔三郎」の筆名で創作活動を始め、『盛京時報』副刊に小説や散文を発表する。九一八事変後、吉林省舒蘭県東北陸軍六十六団二營で抗日を企てるが失敗。ハルビンに出て、ハルビン防衛戦に参加する。ハルビン陥落後は再び文筆活動を始め、蕭紅との運命的出会いに至る。小説『八月的鄉村』他、小説、雑文、隨筆等、執筆は多岐に亘る。
  - 2) 葛浩文 [Howard Goldblatt] 『蕭紅評伝』北方文芸出版社、ハルビン、1985年8月、73頁。
  - 3) 聶紺弩（1903年－1987年）湖北省生まれ。作家、評論家。1934年12月9日、魯迅が蕭紅と蕭軍のために設けた小さな宴席で、二人は聶紺弩夫妻に紹介され、終生の友人となる。
  - 4) 聶紺弩「回憶我和蕭紅的一次談話」『蕭紅選集』（序）人民文学出版社、北京、1981年5月。
  - 5) 聶紺弩「在西安」『新華日報』重慶1946年1月22日（王觀泉編『懷念蕭紅』黑龍江人民出版社1981年2月、30－31頁）。
  - 6) 聶紺弩「在西安」（前掲書34頁）。
  - 7) 蕭軍の『側面』（香港海燕書店1941年）によると、蕭軍は裴馨園の依頼を受けて、1932年7月12日の夕刻、

## 蕭紅の散文集『商市街』について

裴馨園の手紙と数冊の本を携えて、蕭紅のもとを訪れた。裴馨園の手紙を読んでいた蕭紅が、「あなたが三郎なのね。私はあなたの作品を読んだことがある」と驚いて言った。そのあと、蕭軍は、彼女がこれまでの経緯と境遇を語るのに耳を傾け、彼女が書き散らした図案を見、彼女が書いた詩を読んだ。この瞬間、彼は「世界が変わった」と感じ、「目の前にいる女性は世界で一番美しい女性だ」と確信した、という。

- 8) 蕭紅が退院した時期については鉄峰は10月とし、尾坂徳司は9月末か10月初めとしている。
- 9) 沈巧瓊「試論『商市街』中女性的生命体験」『社会科学輯刊』2011年2月。
- 10) 葛浩文前掲書70頁。
- 11) 彼らが商市街へ引越して間もなく、裴馨園は『国際協報』の職を解かれた。後任の陳雅虞の補佐をしたのが、蕭軍の東北陸軍講武堂の学友方未艾で、蕭軍とは吉林省舒蘭県東北陸軍六十六団二營で抗日に失敗した後、一緒にハルビンに出てきて文筆活動に従事していた仲である。方未艾が『国際協報』に来た後、蕭軍は『国際協報』副刊の原稿を書き、また『国際協報』の特派員として水害の避難民のキャンプとハルビン軍医学校の卒業式を取材して、15元の報酬を得た。それで、蕭紅と蕭軍はしばらく食いつなぐことができた。
- 12) 金劍哨（1910年－1936年）瀋陽で生まれ、幼い頃ハルビンに移る。1928年から文筆活動を始め、1929年、上海芸術大学に入って画を学ぶかたわら、田漢の率いる「南国劇社」に入る。1931年中国共産党に参加。九一八事変の後、抗日救亡と党の地下工作に従事するため、ハルビンに送り込まれ、抗日愛国運動を組織する。1936年日本の特務機関に逮捕され、8月15日、死刑に処せられた。
- 13) 鉄峰『蕭紅伝』北方文芸出版社、ハルビン、1993年8月、142頁。
- 14) 陳潔儀「論蕭紅『商市街』—四個重要的空間意象」『中国現代文学研究叢刊』1998年2月。
- 15) 鉄峰前掲書146頁。
- 16) 『棄児』発表の後、『王嫂さんの死』『風を見る』『足に巻いた包帯』『奥様のスイカ』『黒い子犬』等の作品が、『ハルビン公報』副刊『公田』、長春『大同報』副刊『大同俱樂部』、『国際協報』副刊『国際公園』に掲載された。
- 17) 『夜哨』は、8月6日創刊、12月24日停刊、計21期。蕭紅の作品は、小説『二匹の蛙』『唾の老人』『夜風』『早朝の道路』『渺茫の中』、散文『中秋節』『煩憂な一日』、詩歌『八月』。
- 18) 『跋涉』には、蕭軍（筆名：三郎）の作品六編と蕭紅（筆名：悄吟）の詩『春曲』と短編小説『王嫂さんの死』『看板描きの助手』『黒い子犬』『風』『夜風』の五編が収録されている。
- 19) 鉄峰前掲書148頁。
- 20) 白朗は1912年、遼寧省生まれ。東北地区の共産党文芸運動を組織した作家羅烽の妻。作家、編集者として活躍する。蕭紅の友人であり、よき理解者であった。
- 21) 沈巧瓊前掲。
- 22) 馬雲「蕭紅『商市街』的創作心境与情感世界」『河北師範大学学报』2002年11月。
- 23) 許広平「憶蕭紅」（筆名：景宋）（王観泉編『懷念蕭紅』13－14頁）。
- 24) 聶紺弩「在西安」（前掲書31頁）。

山 本 和 子

25) 馬雲前掲。

26) 王超英「漂風逸響流水悄吟—談蕭紅的散文創作」『蕭紅研究』ハルビン師範大学、1983年。

(やまもと・かずこ 国際言語学部准教授)